

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別振承認第三五二號
昭和二十八年十一月十日印刷 昭和二十八年十二月十五日發行

第十九卷

十二月號

淨

土



蓮久

十二月號

人間釋迦

バレエに於ける石井漢は余りにも有名すぎる存在であるが、氏がその野心的なテーマとして釋迦——特にその人間的内面性を取り上げたということは、近來にない快事である。武者小路實篤も

「この大きな材料、我等の文化に最も大きな影響を与えた釋迦の最も調子の高いドラマチックな場面をとつて、舞踊化することは、日本の舞踊家として最も野心的な世界的なくわだてだと思ふ」と、その感懷を洩らしているが、事實、此バレエを構成している三ツの場——

第一幕 カピラ城の饗宴、第二幕 菩提樹の森、第三幕 歡喜の坩堝——は、それぞれ人間的悩みの深さと、宗教的信念の強さと、再び歸り來れる現實世界の新しい歡びを表現することによつて、人間ゴータマの佛陀釋尊への過程を、絢爛たるバレエの律動の中に捉えんとしたものが、その意圖するところは、佛教を、そして人間のための宗教を、目に美しく、耳に快き形式の中に端的に具象せんとしたものである。

世間では「佛様」といえばお寺の本尊に安置されている、寂靜の尊像をのみ聯想しがちであるが、此バレエに於いては、佛もまた人間として存在していたという事實を、いわば動く姿の佛を描き出すことによつて、長井眞琴博士のいわれているように、

「かくて永くお厨子の裡にあつたお釋迦さまも人間社會に飛んで出て、民衆の魂の中に生きて來た感を深くしている」のである。

私はこれを日比谷公會堂で見たのだが、あの廣い堂を埋める觀衆の數に壓倒されると共に、更に感銘すべきことは、その大半以上が、若い、男女によつて満たされていたということである。無論、石井漢の名によつて、或は劇バレエという内容によつて、大半が集まつたものとしても、とに角、これを通じて釋尊を見なおし、或は佛教に期待するものを持つて、夫々の家路についたであらうことと確信するのである。

藝術を通じての理解こそ、現代に最もよくマッチした布教であることを、しみじみと感ずる反面案外に、少なかつた佛教々國自體の協力に一抹の淋しさを覺えつゝ、私も群集の流れに入つたのであつた。(N生)

十二月號 目次

隨筆 冬 枯れ……………吉田絃二郎(1)

＝時評＝ 赤い羽根の行方……………竹中信常(5)
何か缺けたもの……………高瀬廣居(25)

御 身 掛……………新保義道(8)

四つのはなし……………森 正義(10)

年は不安に暮れゆく……………澁谷賢應(18)

成 道 會……………(4)

行 紀 永平寺まいり……………安居香山(22)

評 「浄土への道」……………(13)

書 「幼兒の生活と創造の保育」……………(21)

趣味 戀の文箱……………梅津和夫(17)

話 童 おはかまいり……………吉田典子(14)

史 話 滅後の法難……………鶴田甚泉(28)

芝 園 だより……………表三 保育欄……………(表三)



冬 枯 れ

末 田 純 子

今年もいよいよ残り少なくなつた。この一年を振りかへ

たしかに一方では長病ひをせず死んでゆくのかと思ふと

つて見れば故郷の小學時代の友人が二人亡くなつた。その

れしかつた。

訃を聴くごとに「死に支度致せし」とさとされてゐるので

しかしそれと同時に今死ぬのだと思ふと何となくさびし

あるが、また強ひて生き存えようと思はないけれど、生

かつた悲しいといふよりもさびしかつた。もしあの時もう

きてゐることはありがたいことである。

すこし心臓の痛みが強く、呼吸がもつと苦しく、死ぬこと

この夏急激に心臓を冒された時、立ち會ひの醫師は親戚

が決定的であつたとしたらさびしいといふよりも悲しいと

だけにはひそめに知らせて置くやうにと、わたくしにはか

いふ感情が強かつたかも知れない。

くして、家人にいひつけたことを知つた刹那、わたくしは

あのやうな生死の境にあつて、一切をあなたまかせにし

て、悲しいとも、さびしいとも思はないといふことはなか／＼凡夫にはできないことであらう。いや、あなたまかせであればこそ、死ぬることはさびしく、死ぬる時は泣きもするであらう。

今年は裏の畑に麥も作らず、甘藷も作らず、花を植ゑることにしたが人手がなく雑草の生ひ繁るにまかせて置く他はなかつた。それゆゑ夏のころはほとんど人の丈ほどもある雑草で畑を埋められて見るかげもなく、人を雇つて雑草を刈り取るより外には手はないだらうと思つてゐた。

すると冬が近づいて一二度水霜が降りるやうになると、あれほど畑を埋めてゐた雑草が枯れ枯れの姿となり、痩せほそつて地にたほれてしまつた。そして今まで雑草の蔭にかくれるやうにしてゐたコスモスが、とりわけて人の目を惹くやうな美しさを見せて來た。

わたくしは散歩をしてゐる間に、わたくしの畑と同じやうに雑草に掩はれた或る廢園にコスモスの花を見た。そこにも今まで氣付かなかつた美があつた。それ以來わたくしは毎日の散歩にその廢園のそばをたどることに決めた。

耕作地の片隅に小ひさなバラック建ての家がある。戰災に家を焼かれ、武藏野にバラックを建てたらしい若い夫婦づれの男女が住んでゐた。わたくしは毎日散歩をしてはこの前を通るのでいつとはなしにお互ひに默禮して行き過ぎるやうになつた。

やがて夫婦の間には男の子が生まれた。いつの年も秋になればその庭を埋めてコスモスの花が咲いた。

その家の子供は竹棒をふりまはして蜻蛉を追ひかけるほどの大きさになつた。が、その若い妻は三四年前一人の子を遺して死んだ。かの女が死んでからは花畑はつぶさ

れて野茱萸になつてしまつたが、それでもどこかに古い種子が落ちてゐるのであらう、毎年秋になれば畑の片隅にコスモスが咲く。あたかも幼子を遺して死んだかの女の悲しみを思ひ出させるやうに。

しかしそのコスモスも年が経つごとに少くなつて来る。去年の秋までは五六本くらゐは咲いてゐたが、今年の秋はたゞ一本だけが咲いてゐる。

わたくしの裏の畑の隅に、檜の下に三頭の犬の墓がある。終戦に前後して死んだ犬の墓である。墓の上に石のお地藏さまを安置することにした。

そのお地藏さまは安置してすでに七八年にもなるので、もの寂びたお姿が尊く拜まれる。

三匹の犬は大戦中わたくしといつしよに食ふものもなく

生きてゐたのであつた。近所の人からふすまのお握りをもらつた時わたくしたちはどんなによろこんだことであつたらう。そしてそのふすまを三匹の犬と分け合つて食べた。わたくしはまた三匹の犬をつれて武蔵野を歩いた。そこには道ばたに捨てられた甘藷のつるがあつた。つるには時として小指ほどの甘藷がついてゐた。犬たちはそれをむさぼるやうにして食べた。

何も食ふ物なく飢えながらも犬は決して臍甲斐ない主人をうらみもせず、さびしい眼をしてわたくしを見た。

お地藏さまを拜んでゐると、あの三匹の犬の訴へるやうなさびしい眼がよみかへつて来る。

犬の墓のまはりにもコスモスの花が咲いてゐる。

静かに佛さまの慈眼を想はせるやうに。

×

×

×

星は無数にある。だが、譬えに言われる如く、曉天の星はその數、極めて少い。而もまた更に、今を去る二千五百余年の昔、十二月八日の曉天に、釋尊の澄明した心頭に射し込んで、その心機を一轉せしめ、人の子ゴータマから、覺者釋尊にまでの跳躍を可能ならしめたものは、たつた一つの明けの明星であつたという。

星の、その如く、人もまたその數は無数であるにしても、よく悟り得て、佛陀たり得たものはたつた一人であることは、成道の記念を迎える我等佛徒の、おごそかにも、泌々と憶念すべき事實である。

人もまた佛たり得る。そのことは有難くも尊いことではある。だが然し、より以上に尊いことは、成り得ることを自ら示現し給うた釋尊の、その底知れぬ深き慈愛をそのままに素直に受けとめて、無心にこれを渴仰することである。

釋尊の教えを理解し、これを宣説する。これを以て足れりとすることの、何とその眞意にそぐわぬことか。たゞ知ることのみに追われて、その知の源を尋ねず、たゞ宣べることのみして、その本を行わぬことの、何と猿衣袋にもまさる愚かしさであることよ。

釋尊の、十二月八日、曉天の悟得の裏に、秘みかくれたる、余り



曉天の星

—成道會によせて—

にも人間的な、従つてそれ丈けに眞實な、悩み、苦しみ、憤り、焦りの、深く大いなることに思い致せば、どうして、たゞうわべのその言説のみに、心まどつてのみいられよう。

人が佛になり得たということは、眞實に人となつてこそである。自らの何たるかを、思念によつてはなく、體得に於いて味了した者にして始めて、自らを超克して佛への道に進み得る。自らを知らず、自らを味合わずして、どうして己れを超克し、これを否定し、佛の位にすゝみ得ようぞ。

成道とは、正しく佛となることではあるが、道に就くまえに、もう一度自らをふり返えり、自分が眞實の人間であり得るか否かを確かめたい。

成道會とは、この如くに、佛陀の誕生を壽ぐと同時に、自らの人間の性を自覺するためのこよなき機會に外ならない。

繰り返えしていう。星の數は多い。だが曉天の星は、その數極めて少い。星のその如く、いうところの人間の數は多い。だが、眞實の意味での人間は、その數極めて少い。いわんや佛たり得た人は、はるか昔、インドにあつて、菩提樹下に沈思するゴータマの、覺念の頭上を照らした、東天のたつた一つの星の如くに、たゞ獨りにして、たゞそれのみ尊かりし人のみであつた。

赤い羽根の行方



竹 中 信 常

山紫水明のスイスの山間の道筋に、ひつそりと置かれたコムニティ・チェストに始まつた共同募金の秘められた善行と静かなる同情という本来の性格も、日本にやつて來ると、とたんに大變なさわぎを惹き起こしている。

私は、赤い羽根の行方が、丁度枯葉の地くぼみに音もなく吹き留るように、心ならずも貧困と窮乏にあえぐ人々の生活のまわりに、それとなく集つて行くのが、年々才々の成果であると信じていた。そのように、宛もその羽根の柔かさが物語るかのように、ふんわりとした同情と憐びんのしつとりとした心情で、氣の毒な人々をやさしく包んで上げようとする、正にその寸前に、その集積が心歪める、荒々しいちん入者のために、無慘にも蹴散らされ、踏みにじられたことには、しん底からの怒りを感じざるを得ない。

(5)

それが、救世済民をモットーとする團體の、ほんの一部の人々によつてなされたということは、更に私憤をかき立たせる所以である。

その人々が、ことさらの似非道義者であることが、心憎いのである。然し、私が只、ここに、私の感じた怒りをのみぶちまけて見たところで、それは反つて、本誌を私情のうさ晴らしの具にしているにすぎぬという譏りを受けることになる。又、私と同じ心情は、恐らく良識を持つ本誌の讀者の等しく感懐するところであらうから、これはこれぐらいに止めて、そのような結果を生むに至つた、靈友會教團の性格を、私の平常手がけて來た範圍に於いて明かにして、以て、所謂「新宗教々團」の共通性の一端を、明らかな姿の下に捉えてみることにする。

新興教團の組織的特質は系統的封建性と地域的並存性の二つにまとめてみることが出来る。

靈友會の場合、その教團組織は會長直系の支部と、御旗組と呼ばれる數々の大支部との二系統から成つてゐる。そして御旗組は夫々

その下部組織として支部及び法座を持つて、それが系統的に統制され、無數の法座から順に支部→大支部と手操つて行くと、最後の、三角形の頂點に當るところに、會長が鎮坐ましましてゐるのである。而もこの縦の糸は非常に強い糸で、これを斷ち切ることは仲々出來ない。たまたますめられて入會すると、すすめた人は親、すすめられた人は子、という風に、親子の關係が出來、子は親のいうことを絶対にきかねばならぬとされる。一度入會すると、余程意志の強固な人でない限り、親子の糸を斷ち切つて、脱會することは困難である。そして此關係は縦にずつとつながつて、會長は親の親の親で御親様(みおやさま)とも呼ばれて、その命令は絶対服従であるどころか、直々に會うことすら仲々許されないのである。此様な教團組織はよくかつての天皇制に比較されるが、絶対權力の點では正にその通りである。

それだから、赤い羽根の如き實踐活動の場合など、會長の號令一つで、會員達は狂熱的な興奮を以つて協力する。而も、これが先に云つた地域的並存性の組織と相い挨つて、更に一層の効果を擧げるのである。地域的並存性というのは、先の系統的封性が斷ち切りがたい強い糸でつながれてゐるのは、丁度反對に、横の連絡はバラバラに斷ち切られ、そこには何等の關聯も許されないのである。たまたますめられて隣り村の法座に入會し、その法座主と親子關係が出來てしまうと、自分の村にある法座とは何の關係もなく、極端なのは、道で會つてもお互いにあいさつすらしない。更にすすんでは、割り當てられた會員獲得のために、他の法座の圏内に侵入し

時には惡口雜言を以つて他の法座をけなし、自分の法座に入會をすすめるといつたことすら、珍らしくないので、靈友會新聞に毎號掲げられてゐる、會員の守るべき綱領の中にも、はつきりと、入會をすすめるのに熱心の余り、他の者を罵倒したり惡口したりしてはいけないと、一項を設けていましめてゐる程である。此様に横には全然バラバラに、各地域の法座が並立的に存在してゐるので、その間には往々にして色々の紛争も起る。また逆に、これを利用して、その競争心をあふれば、共同募金など朝めし前ということになる。それだけでなく、新興宗教の會員の大部分は、虚榮心と競争心の旺盛な、而も時間的には或程度の余裕を持つ中年女性なのだから、ちよつと焚きつければ、たちまちにして金切聲を擧げて大舉出動するわけなのである。

人間、金とひまのあるのが一番困つたものである。家のことは嫁か女中にまかせておけばよい、夫は毎日つとめで晝間は何の用もない。經濟もまあまあ小づかい位には困らぬ。といつて、芝居や映畫に日を送るのでは近所の手前、世間態もある。何かうまい時間のつぶし方でもあるまいか、と自分では意識してなくとも、潜在意識的にこんなことを考へてゐる連中を、大量に、「信仰」という名で吸収し、「社會奉仕」という看板で狩り出すのだから、その効果は正に百パーセントである。體內にたまつたエネルギーの發散場所に困つてゐる人々に、心のしこりを放下させてやるのだから、此意味では新興宗教にも立派な御利益はあるわけである。

新興宗教は何故お金集めが上手なのか。それは上に述べたような組織的な事と、それに加えて心理的効果をねらうからである。だから、私は靈友會が自分の教團のために、會員から幾十億圓の金を徴收しようと、別に意に介するものではない。金を集める丈けのことだつたら、むしろ吾々も新興的教團組織を多に援用すべきであらう。

私のいいたいことは、冒頭にも述べたような、公共のための公共の金の一部が、無慘にも悪費されたことである。刑法上の罪は法律によつて決定されるであらうが、問題は「宗教團體」の名に於いて行われたことに對する。宗教的・道德的責任である。而もその一半はこれを委託した側にもある。それは宗教團體というものを、更に深くいうならば宗教というものを、眞實に理解していないことに外ならない。

成程、組織の上では集めるに便利のように出來ているから、これを利用する事は結構。たゞ澤山集めて下れるからという理由だけで靈友會を使つたのならいいのだが、それが宗教の名に於いて集められたということは、而もその結果あのような事件を引き起したということは、靈友會というものを充分に理解しなかつた責任を問われなくても仕方あるまい。その上、靈友會が會長即絶對という内容を持つてゐるからには、更に會長及び一部幹部の個人的閱歷にも充分注意を拂うべきであつたらう。常識的にいえば、此等の人々はいつ昭和二十五年にも問題を起した札つきの人々であることを、どうして無視してこれに依頼したのか分らない。

或る宗教團體がたまたま一部の流行を得たとか、逆に退潮を兆しているとかいつた、社會事家に眩惑されることが、私達にとつて一番危険なことなのである。それよりはむしろ、時の經過と社會的常識の公正な判決を待つべきで、それには、自らに持する一本の強い心棒を確保していなければならぬ。

僧院の朝

静岡縣 澤田 岳潤

朝の鐘つき終りてみ堂へゆく廊下渡れば目向高鳴く

佛殿の灯明の火影ほのぼのとみ堂あかるくなりけるかも

みほとけの相好幾々と拜しけり獨り修する朝の勤行

寺俗みな健にして朝飯の箸いただいて飯はみにけり

み佛の光のなかにつつまれて世に生くる甲斐知りそめしかな

佐野市 佐々木 よね

吾が庭はせまきながらも花ありて朝な朝なにみ親にさゝぐ

御 身 拭

(お み ぬ ぐ い)

新 保 義 道

つも、その機を得ず残念に思つていたところ、幸いにも昨年は十二月下旬の輪番布教を拜命し、この有難い法要にお参りすることが出来たのである。

「今日は御身拭の聖日だ！」

朝起きた時から身内がひきしまり、京都名物の底冷えする寒さの中にも今日の御身拭式に随喜するかのように感じられ、本山内の空気が何か平日と異つているようになつてゐる。華頂の峰にも瑞氣みなぎつてゐるようである。朝参會——短かくて五六年、長い人は三十数年毎朝お参りを續けている——の人達は朝のおつとめの後も家に歸らずに御身拭式を待っている。本山の諸講社や、一般参詣人が三々五々登つて来る。

定刻、廊鐘があたりの静けさを破つて鳴り渡ると、御門主の出座である。長い「うぐいす張り廊下」を渡つて昇殿、大殿内は京阪門中寺院や参詣人で一杯である。地の底からでも湧き出する如き低い御念佛の中に御門主始め大衆が著座する。

やがて古式通りのおつとめが初まる。

光明遍照 十方世界

念佛衆生 攝取不取

低聲のお念佛がはじまるころ、丁字湯に心身

を淨め、口あてをかけた四人の奉仕僧が左右から須彌壇へと進んでゆく。須彌壇の下と上にて敬虔なる三禮を終つて後、壇上宮殿型大厨子の中に吸い込まれるように入つてゆく、薄暗い大殿、唯ろうそくの光のみがあかかと輝いている中を、やがてその光に照されて御尊像が大厨子の外に姿を現わす。

この瞬間！

一時満堂の人達の稱える念佛の聲が止んだかと思われると、堰を切つたかのように低聲の念佛が異口同音に高聲のお念佛へとかわり、暫しの間この感激のお念佛は續いてゆく。この間に御尊像は靜かに須彌壇上より大前机へと移されてゆく。この時参詣者の感激は最高潮に達し、廿五間四面の大殿は念佛のルツボと化す。私はこの時程、吉水の流れを汲む念佛門侶としての幸せを感じ、お念佛を申させて頂く有難さにむせび、私如き者の爲に一生涯を御苦勞下された上人の御高恩をひし／＼と身近く感じたことはなかつた。

この御尊像は上人に最も因縁深く、上人御在世の砌より八百年後の今日に至るまで、吉水の流れを汲む者の尊崇おかざるものであり、大悲倦まず八百年否今後永遠に慈悲の御手をさしのべ給うところのものである。勅修

年の瀬も迫る十二月廿五日は、淨土宗總本山知恩院に於ける一年最後の大法要の営まれる日である。即ち大殿に安置し奉る元祖法然上人の御尊像をお淨めする御身拭式が、いとも厳肅にとり行なわれるのである。年末是非一度この御身拭式にお参りしたいと念願しつ

御傳には、

「武藏國の御家人に桑原左衛門入道と云う人あり、吉水の御房へ上人を訪ね念佛往生の道を開き、但信稱名の行者となり、それ以來故郷武藏國にも歸らず、祇園の西の大門附近に居をかまえて、常に上人の禪室に參じては不審を決し念佛をはげんでいた。そして私如き極惡の凡夫がこの度往生を遂げることの出来るのは、ひとえに上人御教誡の賜であると深く御恩を感じ、報恩の爲上人の御木像を造られた。上人はその志に感じて御自ら開眼せられたのである。上人御往生の後にはひたすら生身の思いにて歸依渴仰して居られた。その後入道は種々の奇瑞をあらわした。往生された。往生の後同宿の尼さんがその木像を知恩院へ送られた。この御木像が今日迄傳えられて來ている御尊像と云われている。」

(9)

大机の上に御尊像が出産されるや、御門主は左右に執事を伴い尊前に進み、三禮の後白い絹布を執られて全身を御拭いになる。一旦低聲にもどつた參詣人のお念佛の聲は、この時再び高聲の念佛へとかわつてゆく。この時私は、私の稱えるお念佛が白い絹布となつて

御尊像を拭わせて頂く氣持で一生懸命に稱え續けた。満堂の參詣人も亦、恐らくこの思いに住しているのであらう。御門主の手の動く間高聲のお念佛が續けられてゆく。

私はこの姿こそ信仰の世界にしか見られないものであると思う。木像を單なる木像と取り扱わず、そこに八百年前の生身の法然上人を拜し、觸れ、ば温かき體温を感じ、上人の血潮が私の血となつて脈々と流れて來るのを覺え、師から弟子へ、師から弟子へと傳え來つた血脈を、今こそはつきり我が體に留め得た喜びを感じ、八百年前の上人に直々お會い奉ることを得たような感激にひたつたのである。かくして僧俗、百男百女の稱名念佛の法悦の中に御身拭は終りに近づいてゆくのである。

門主の御身拭が終ると前と同様四人の奉仕僧の手に奉持されて、別れを惜しむかの様なお念佛に送られて大廚子の中に奉安されてゆくのである。御尊像を仰ぎ奉つた感激が大きかつただけに、御姿を迎えた時の感動が強かつただけに、お姿をお送りするお念佛には心なしか力がなく、感激もなく、むしろ別離に似た淋しさ、會者定離の悲しささえ覺えるのである。再びこの御尊像を拜することの出來

るのは明年四月の御忌大會を待たねばならぬ、而も御忌大會は御厨子の中に安置されたまゝ御開扉されるだけで、同じ親子であつても、公式の席上官服を着た父に對する如く、親しさの中にも幾分の親近さが缺ける。この御身拭こそは家庭に歸つた父に甘えると云う親しさ、近しさをひし／＼と身に感ずることが出来るのである。

今靜かに御身拭を追想する時、自己の稱える念佛が白い絹布となつて御尊像を拭い奉るのではなく、實は上人の殘されたお念佛によつて、この濁りきつた私の心をきよめて頂き、勿體なくも上人の御手によつて私の垢を洗い清めて頂いているのではないか。

日々に造りし罪は塵ほこり

南無阿彌陀佛は等なりけり

拭われなければならぬのは上人の御尊像ではなくして、私のこの心ではないか。拭おうとしても到底自らの手で拭うことの出来ない心の垢、唯上人の慈悲の御手、お念佛のみが拭うことの出来るものである。

「煩惱妄念起らば起れと打ち捨て、念佛申すが手にてはべるなり」唯ひたすら念佛してゆくとともに上人の教の眞髓があるのである。(知恩院布教師)

四つのはなし

森 正 義

おたいや詣り

えんぎ が悪い

關西の寺院では、壇信徒の家の佛壇に

毎月 志す先亡の命日或は連夜に 讀經念佛

を捧げに おまいりする習慣がある。これ

の起源は 徳川幕府の行つた宗門改めに端を

發すると云うが 確たる史實は無い。大學

出身の若い住職たちに取つては このおたい

やまいり (中部地方では「おじようはん」

と云つてゐる) が非常に いやらしい。

しかし 佛教が個人の目覺め を目標にして

いる以上 家庭傳道の最良の好機であると思

う。

しかしながら 忙がしく 立ち働く家人を

つかまえての長談議は かえつて對手に敬遠

されてしまう。そこで お釋迦様の大經で

説かれた 先求承聞・對機說法で布教をする

ことになる。こゝに 三つの家庭傳道の記

録を公開することにしたのである。幸いに

ご批判いたゞけたらありがたい次第である。

山本家は八百屋である。月に一回、卅日

におまいりするのだが きまつて奥の間で二

十三才の息子の正一君が寝ている。私が入

つて行くと

「げん(えんぎ)が悪い。」

と云つてゐるのを聞き流して 如法に佛壇

の前で おつとめ を終つて クルリと後を

向いて正一君に

「あなたは さつき 私が入つて來たら

えんぎ が悪い。いつか送つてもらわんな

らん(お葬式)と云つて居られましたね。

あなた方は 僧侶を見ると すぐ お葬式を

考える。そうじゃないんです。本當は

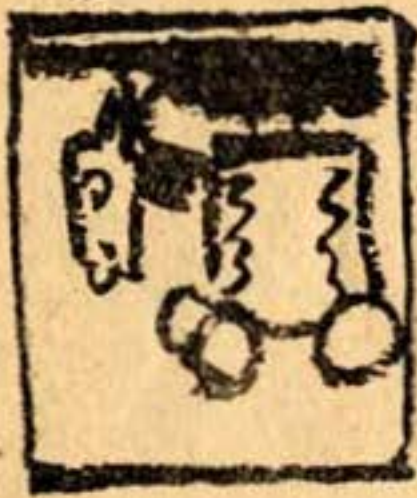
どうして本當に生きて行けるかを考えるので

すよ。あなたは未だ若い。働き盛りだの

に寝て居られる。その枕もとで なむあ

みだぶつ と お念佛を申した。生きなが

ら お念佛を申してもらつて と あなたはキ



ットげんが悪いと思われたに ちがいない。
あみださま の いのち は かぎりない

いのちなのですよ。 こうして あなた と

私が おはなし している。 こゝにも あ

みだ様の お力が生き働いているのですよ。

ホーラ この佛壇の おローソク立てを ご

じんなさい。 鶴と龜でしよう。 鶴は千年

龜は萬年と云いますね。 かぎり知れないと

ころの 生命 をいたゞくために なむあみ

だぶつ と お念佛を申させていたゞくので

す。 病氣で寝ている時こそ 本當に お念

佛を腹の底から申さずにはいられないぢや

ありませんか。」 こんな事を 何度も話し合

つて歸つた。 この次 おまいりしたら 正

一君が 店で元氣よく働いていてニッコリ笑

いながら

「今日も えゝ おはなし 聞かしとくん

なはれ」

と云つた。

我が子の骨をしやぶつた

岩崎家は床屋である。

おつとめの間中 若い妻君が 白い上衣を

着たなり 手を合わせて拜んでいた。 佛壇

の上には 今日が命日である娘さんの(中學

一年生のとき亡くなつた)寫眞と圖畫が額縁

に入れて掛かつている 妻君は こんな告白

をして呉れた。

「思い出すだに涙の種です。 三回忌の済

んだ今日まで いまだに お骨箱を置いて

居ります。 どうしても この子の事があき

らめられないのです。 私は この子の骨ま

でなめました。 雨や雪の降る晩には さぞ

つめたかろうと思つて お墓へ傘を きせか

けに行きました。 笑つて下さい。」

「ありがたい 母心の尊さに もらい泣き

いたしました。 しかし 奥さん そこまで

は どの母親でもする 本能の愛情なので

すよ。 もう一步 進んで あなた の お

子さんの の 永遠に生きる道を考えようでは

ありませんか。 先立つ子供は善知識だと申

します。 あなたが 佛様の前に手を合わさ

れるようになったのも あなたの 最愛の

おじょうさんの 死 と云う 嚴肅な 事實

からでございましょう。 我が子の骨をし

やぶつた 母の愛情は動物愛です。 こゝに

法然上人様のお教え下さつた お念佛があ

ります。 法然さまは 私に逢いたかつたら

お念佛を申しなさい。 と おつしやいまし

た。 なむあみだぶつ と 唱えられる あ

なたの 一聲々々の中に 亡くなつた あな

たの おじょうさんは 永遠に死なない 天

地の大生命となつて あなたを明るく 生か

して下さることでしょう。 そこに おじよ

うさんの死を むだ にしない 生活が開け

てくるのですよ。」

この奥さんの 明るい笑顔は この理髪店

の繁榮の源となつて、町で一番親切で清潔な

店として 客足の途絶えた事がないのだ。

念佛一家

石井家は 醬油家である。最近 世取りの息子さんと 御主人 を亡くされた。毎年二人づゝのお葬式を出していると云うこの 奥さんの氣持は察するだに あわれである。さすがに 御主人まで亡くされた時には この氣丈な奥さんも悲嘆のあまり しばらく 呆然として居られたそうだが 平常念佛の功力この時にハッキリとあらわれて満中陰の濟んだ この頃では 朝夕の念佛かゝした事なく 小學校四年生のたつた一人の孫さんの生長を たのしみに一生懸命家業に精出して居られる姿は誠に雄々しい限りである。大きなお佛壇にズラリと並んだ十二のお位牌 この奥さんの 額のシワにきざみこまれた苦勞の数々。それでも この奥さんは ひるまない。ただ お念佛のまにまに 毎日を明るく 過して居られる。この間も二十年前に使つていた 丁稚の龜吉どん が

横濱で大變成功して、ふと ご主人の亡くなつた事を傳え聞いて お詣りに來たと云つて居られた。この お店には勞働基準法は要らない。

それは この 奥さんの 心掛けが お念佛によつて みほとけさまの よろこばれる働きとなつてゐるからである。この店の店員が お得意様へ ご用聞きに行くと みんなが亡くなつた息さんの話をするそうだが亡くなつて初めて この店の息子さんと云う事が判つたそうである。お念佛生活にはへだてがない。私は このお店へお詣りすると この奥さんから いろいろと教化にあづかることを 無上のたのしみにしてゐる。奥さんは 奥さんで 私の おはなしを聞くのが一番たのしみ だと云つては居られるが。合掌

一九五八、一〇・三〇

(大阪府南河内郡中村西光寺住職)

車中にて

東海道線の汽車の中でのこと、通路を隔てゝ私の反對側に坐つていた五十歳前後のみすばらしい婦人が、しきりに聲を擧げてお經の練習をしている。聞き耳を立てゝ聞いていると阿彌陀經らしい。多くの乗客の中で聲を出してまで練習しなくてもよいのに、一寸變つた人だなあと思つていた。

この様にして數驛を過ぎた、その内にその婦人は下車する準備か、お經の本をしまひ、荷物を直しながら、前に坐つていた夫婦らしい中年の人に話かけた。

「錦を着て、立派な屋敷に、多くの人を使つて生活している人の中に、獨りぼつちの淋しい生活をしている人もあるのに、ぼろを着て、一人で汽車に乗つていても、實は阿彌陀様と二人の力強い生活をさせて貰つています。貴方達もどうか阿彌陀様とお二人の生活をして下さいね、之程力強いものはありませんからね、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、では、さようなら」

と荷物を持つてそゝくさと近江八幡驛で下車した。何の飾り氣もなく、自分の法悦をわかち與えている姿はまことに尊くはじめ變つた人だと思つた自分が恥かしくなつて、その後姿を心の中で拜んで見送つた。(G・S)

評 林隆碩述

書 淨土への道

汽車に乗り遅れて汽車待する退くつなるべき田舎驛での數時間を、「お陰で一人静かにお念佛を申稱えさせて頂いて有難い」と喜ばれ、總本山知恩院執事長の劇職に在りながら自室にもどられるや常に淨土宗全書を繙いて居られた方こそ、五重の話「淨土への道」の著者、勸學林隆碩師その人である。師は人も知る 淨土宗門の耆宿、布教界の重鎮である。

今回知恩院に於ける五重勸誡をそのまゝ筆記上梓したものが、「淨土への道」である。従つて誰にも分り易く平易に述べられ、平易ではあるが決して平凡でなく、汲めどもつきぬ内容を持つてゐる。この點宗門人にとつては絶好の布教指針であり、信者にとつてはこよなき信仰書であり、居乍ら五重の話が聞ける必讀書である。

師は開卷第一に「佛教はたゞ理屈が頭で解つた、道理が心得られただけでは佛教ではな

い。眞實の佛教は一行者になると言う事である。……眞の信者は必ず行者にまでならねばならぬ」と説かれてゐる。

初重の結論として「この私の様な愚かな淺ましい者」と、法然上人の御一代の御苦勞、念佛の教を私一人の爲と受けとれと強調され、正行とは阿彌陀佛と私との差向いにさせて頂く行であると、夫婦さし向いの例も引かれ、生徳の御示しと言われてあるが、流石に肯綮に當つた御説明である。

次に元祖の三大發見として、第一に御年四十三歳の折の本願念佛の發見、第二に六十六歳選擇集に表われた選擇の二字の發見、最後がそれ以後御流罪の間に於ける一行三呼の發見を述べ、最後の大發見は選擇集にも示されず一枚起請文に至つてはつきり表れてゐるので、申す念佛を強調されてゐる。

元祖様、最後の大發明大發見が申す中に、稱うる中に、阿彌陀様の御名を呼ぶ中に、三心も四修も五種六行もすつかり皆こもつていたと云う事である。四十三歳で他力淨土の道に入るには入つたが、申す中に、こもつていた事は見抜く事が出来なかつたし、又六十六歳の時に見代りになる書物が出来たけれ共、三心四修五念が

こもつてゐることを見定める事が出来なかつたのである。だから選擇集は、どこを開いて見てもその御示しがない。最後

九年間の中に、アア有難い、これが極樂へのほんとうの土産である、申す中にこもつていたのかと喜ばれた。申さにやあかんとは、上人最後の一大發見の中より出るものであつて、廣大無邊である。アアそうか。申す中に凡てがこもつてゐるのだとは、そこまでは今まで氣付かなかつたが、これで安心して自らも申し、人にも勧める事が出来るのであるとして、而も最後の大發見であるから勢親房源智上人のもとに應じてスラスラ筆をとられた一枚起請文の中にも、三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中にこもり候なりとの御言葉があるのである。(一一五頁)

五重の説教を開かせて貰つてゐると同じ親しさを以て讀めると共に、その平易な敘述の中に宗乘の講義でも聴かせて貰つてゐる様な、本爲凡夫兼爲聖人の本宗の立場そのまゝの内容を以て述べられてゐるのが本書の特色である。(G・S)

童

話

おはかまいり



吉田典子

おひる過ぎると遊びまわつていたたかしもきつと通りの方にやつて来る。

幼稚園歸りの子供たちが、はなたれた小鳥のようにうれしそうに小鳥のようにしゃべりながら、小鳥のようにとび、はしやぎながらやつて来るからである。

かわいい子もいた。いばつた子もいた。利口そうな子もいた。はなを垂らしているのも時にはみかけた。ぼんやりだまつて歩いている子でさえ、たかしには自分よりは少しえらいかなあと考えた。

小さな玄関前にしゃがんで、たかしはいつもそれをみていた。たのしかつた。おひる前はあちこち遊びまわるので、ひる御飯のあとのひと休みに丁度よかつたかも知れない。

一番のろい子が二人、しゃべり乍ら通つてしまうとたかしの家の前はほつと静かになつた。それを合圖に家の中に上つて、編物をしているかあさんににじりよる。

「ねえ、なんかちようだいよう。」

編物から眼をはなさないで

「まだですよ。まだ三時にならないでしよ。」

と、かあさんに云い切られると、またすぐそこおもてへ引返えすもうあの子たちはみんな行つてしまつた。あの子たちはきつと家へ歸つてお菓子なんかたべるだろう。家へ友だちをつれて来て遊ぶんだらう。

たかしの家では友だちを家の中へ上げようものなら叱られてしまふ。かあさんはご飯の支度や掃除や買物の外は大抵編物をしてゐる。

此の頃は、あの子たちをみている楽しさが羨ましさに變つていつた。

「あの子たちと遊んでみたい。」

そう思うと翌日はわくわくし乍らいつもの處で待つていた。けれども、そろ／＼きやつきやつ云いながら通る子供たちに、何と云うか。何ていつていいかわからない。

たかしは睨むような眼つきでただ終りまでじつとみていた。

みんなうれしそうに歸つてしまつた。すると眼の丸い小さい男の子がひとり、大分たつてからちよこちよこと小走りに通り過ぎようとした。

たかしは呼びかけるかわりに棒切れを前にさし出した。その子はちよつと除けた。少し向う側を通つて行こうとした。また一步、たかしは進み出た。そうなるゝたかしにも勇氣が湧いた。

「やい、幼稚園。」

そう云つて棒切れをすつと出す。小さい子は除ける。また棒切れをにゆうと出す。相手の子は後すざりする。くりくり丸い眼をこわばらせて、それでも泣こうともしない。ただ眞剣に棒切れの妨害から逃れようと、後に退き、横にそれ、四、五回やつてゐるうち、棒切れの隙をみて五六歩突つ走つた。それきりその子は後も見ずにとんで行つてしまつた。

たかしはあつさり失敗した。それでも小さい子が、たしかに自分より小さかつたが、眼をきよろつとさせて、こわそうだつたのは

愉快だつた。

今度は豫期していなかつたのに女の子が來た。脊は高くないがたかしと同じ位だろうか。さすがに女の子はたじろいだまも動こうとしない。一度棒を引つ込めると女の子は前に出ようとする。たかしは棒を突き出す。女の子は更に遠のく。じつと眼に涙が滲んで來たようだ。それでもたかしは引つ込めない。

買物らしいおばさんが近ずいて來た。

「あらあら、あんた。なに、女の子なんかいじめて、かわいそうじやないの。さ、早くお通んなさい。おばさんがみててあげるから。」そう云われてはたかしももうどうにもならない。女の子は一目散に走り去つてしまつた。

云うだけいふとおばさんも行つてしまつた。

ぼんやり玄關に立つてゐると

「たかし、今何をしてたの。よその人に何か云われていたじやないの。家へはいつていらつしやい。」

家へ入つても何もくれるわけではない。叱られるに決つてゐるので、たかしはもうそこにはいなくなつた。

二三日棒切れのいたずらをやつた。

たかしのかあさんの耳に

「お宅のたかしさんはね、通りかかりの人をいじめて困りますわ。」と、こんな事をきかされたのもそれからしばらくつてのことだつた。

勿論、たかしはかあさんにきつく叱られた。

たかしの家に田舎からおばあさんが來た。たかしが三つ位の時に來たことのあるおばあさんだから、たかしはよく知らなかつた。け

れどやさしいおばあさんだつた。田舎の柿をおみやげにくれた。

「たかしさんや。」

という言葉はたしかにかあさんよりはやさしそうだ。

朝早く起きると、佛壇にお燈明をあげ、お線香をさし、數珠をかけてよく拜んだ。珍らしい光景だつた。珍らしいからおばあさんが佛壇の前に坐つてしていると、たかしは時々うしろにまわつておばあさんのしていることをじつとみていた。何だかわからないことを言っている。

「なむあみだぶつ。」

そう云い續ける。

たかしはおばあさんの眞剣さに打たれて、じつとききすました。

「たかしさんや。きようはばあさんとお墓まいりに行きましようぞ。お前さんのじいさんのお詳月だからの。」

おばあさんにそう云われて、何だかわからないが、たかしはうんと返事をした。

たかしはきようはとでもうれしい。おまいりだつてかまわない。家にいるよりどれだけうれしいか知れない。

都電にのつて六つか七つすると降り、五分位歩くと、お寺とお墓があつた。何だかおばあさんと二人つきりしかいないみたいに靜かな道だつた。始めて來たようでもあるし、もうせん來たことがあるようでもある。

お墓はもつとひとつそりして、まわりの木が風でざわざわしている。

たかしの手に握つた二本のお線香の煙が、すうつと何處までもなびいていくのをじつと見おくつた。細い石の道を二つ曲つて奥の隅

はおばあさんは手桶を置いた。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

ぶつぶついい乍らおばあさんはお墓を掃除し、枯れたお花を捨て水をと리카えた。たかしの手からだまつてお線香をとつた。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

たかしはだまつて始めから終りまでおばあさんのすることをみていた。そしてやつと口を開いた。

「おばあちゃん、どうしてきようはおまいりに來たの。」

おばあさんは始めてたかしのいた事に氣がついたように、

「あゝ、お前さんのじいさまのなくなつた日だもの。もう五年になるの。お前さんが赤さんだつたから。さ。」

と改まつてお墓に向きなおると、

「おちいさん。孫のたかしがおまいりに來ましたぞ。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。たかしさんや、お前さんもうやつて、そう、いい子だ。」

たかしの頭をていねいに一つなでてくれた。たかしは昨日までいたずらしてはかあさんに叱られてばかりいた自分が、おばあさんの前で恥しく、このおばあさんになでられてもらつたらもういたずらはしたくなくなつてしまつた。

「さ、なむあみだぶつ、そういうのだよ。おちいさんや、私ももうすぐいくからねえ。けれどもう一年位は迎えに來ないで下さいよ。なむあみだぶつ、南無阿彌陀佛。」

風が少しさむくなつた。

やつとおばあさんは立ち上つた。片手に空の手桶をもち、片手はたかしの手につて、細いお墓の道を戻つた。(隆崇幼稚園教諭)

歌舞伎も近頃では、随分色々な個所が省略されて上演されてゐます。忠臣蔵でも、先月の帝劇で二段目を出したのは珍しい位で、最近では、出さないのが當り前の様になつてゐるのです。むろん昔のものですから、今の我々からみれば、愚にもつかない件も多いには多いのですが、又反面一寸した件を省略する事によつて、作全體の性格が、はなはだしく皮相的なものになつたり、作品の企圖をあいまいにしてしまう場合もしばしばみられます。

忠臣蔵の二段目も、實際に看てみれば、やはり捨て難い味があるものです。しかしいつも残念に思ふのは、三段目の進物の場で、お勘平の戀の文箱の一件を省略してしまふ事です。一般には見逃がされ易い、何でも無い様な場面ですが、むしろ二段目よりも遙かに重要な意味が、あの短い場面にかくされてゐる氣がするのです。

あそこで腰元のお輕が、判官の供をしてゐる勘平に、一と目逢ひたい一心から、顔世の文箱を持つてやつて來ます。こんな取り込みの最中に、歌など持つてゆかなくともよいと言ふ顔世に逆らつて、どんなお取り込みがあらうとも、



戀の文箱

梅津和夫

です。お勘平のさうした出會は、次の松の間での師直と判官との、重大な悲劇の動機を作る伏線でもあり、又六段目へきて「色に耽つたばつかりに」と言ふ臺詞が、一層強く照應されて、勘平の悲劇が一

段様が歌の一首や二首、師直様にお手渡しなされぬ事はあるまいと言つて、その實、勘平に逢ふきつかけを作らうとした、お輕の可憐でいぢらしい行動が、假名手本忠臣蔵の大きな悲劇の鍵になるから

段と人間味を増す、大切な一節であるとも思はれます。あそこでお輕と勘平を出したのでは引立たないから、矢張り道行で華やかに登場させたいといつた、役者本位の御都合主義が、さ

うさせてゐるのかも知れません。しかしそれならばなほさら、三段目の登場があつてこそ、道行の憐れさが一層美しく、我々の心に觸れてくるのだと思ひます。

歌舞伎の中に出てくる人物が、妙に人間離れがしてゐて、さうかと思ふと、くだらない事で苦しんだり、悲しんだりしてゐる様に見えるのは、かうした不注意な省略が、作品の企だてた含みのある構成を、多少なりとも傷付けてゐるので、特に忠臣蔵のごとく、一貫した流れを持つた作品において、戀の文箱の様なきゝいにみえる件にも、改めて正しい解譯と演出とが、古典の保存と言ふ立場から、再検討されてよいのではないでせうか。

(寫眞は假名手本忠臣蔵三段目、勘三郎の勘平、歌右衛門のお輕。)

年は不安に暮れゆく



澁谷 賢 應

洪水、災害、凶作、いまわしい二十八年を送ることになった。今年の借金が來年から帳消しになるわけではないにしても、何となく將來への希望を感じないわけにはいかない。内入にしておいた雜貨屋からいただいたカレ

ンダーの部厚さをながめただけでも一寸心の温まるものを感じる。

來るべき新年に對する希望は、又今年のよう悲しみの多い年をくりかえさなくてはならないのだろうかと言つたような不安をと

なう。

ギリシヤの詩人ヘシオドスがいみじくも遺したパンドラの小箱のように、かなしみとよろこびとは一つの箱の中にごつちやにされておさめられているものかも知れない。凶作は二、三年續くと言つたようなデマさえ流布されて不安をますますゆすぶる。

不安と言えば現代は不安の連續である。歴史家は「二十世紀の危機」と言う。「二つの世界」と言う。「冷い戦争」と言う。政治家は「政界不安定」と叫ぶ「世界恐慌」を云々する。平和憲法は無視される。「保安隊」はついに「不安隊」と言う異名をさえとつた。

不安はそればかりではない。我々の日常生活に於て、いつも我々をおびやかして置いている。朝目がさめる。天候が氣になる。電車に乗りうとプラットフォームに出る。たつた四五分待つのがシャクの種だ。電話をかける。通じない。電話帳を意味なく廣げていらくする。

一體現代人は待つと言ふことがきらいだ。待たされるとすぐいらくする。平和や安定が靜かな寂靜の世界にあつた古代中世に對し

近代人の思潮はじつと待つてゐることは絶対ごめんである。靜止しているとすぐ不安を感じ出す。動くものに乘ぜられて動くとき、ようやく安定する。

満員の電車の中で、止つてゐるときには表面張力的に肩をはつて、不安で他人を(牽制)し合つてゐる。發車が一分でも遅れると「何してやあがるんだろくなあまつたく」と言つて驛員を見かえる。ドアがしまつて發車となると表面張力の不安が去つて、いくらが車内にゆとりが出来る。そうするとたちまちポケットからスポーツ新聞をとり出して小さくたゝんで出ている所だけをよむ。電車が驛につくまでが不安なんだ。そして不安げに各驛々の驛名の札に目を上げる。車内では「懷中ものにお氣をつけ下さい」と言う。いやはや全く不安の連鎖である。

この不安の心理をうまくキャッチしてはなさないものにパチンコがある。あれはきわめてスピーディーだ。第一木屑がかるらない。帽子をとることも禮をすることもいらぬ。ついふら／＼と中へ入つて、くしや／＼になつたつり錢を兩替口に投げ込めばメタルをく

れる。それをもつていつて穴に入れば丸が出る。すかさずボタンとやればガラ／＼とまわつてコン／＼と當つてすぐ結果があらわれる。することも速いし當ることも速い。「大當り」に入ればチリン／＼、ジャリ／＼とスピーディーな音を出す。大ていの人はいらなかつた用意にメタルを穴に半分さし込んでゐる。丸が穴に逃込むやいなや次を飛び出させるしかけである。中には左手をねじまげて、機械的にボタンとボトンをやつてゐる人がある。丸は機械の中を三つも四つも大さわざして飛びまわつてゐる。一つの丸の行く末を見とゞけるのがいかにもじれつたいのだ。當れば店の中に、タバコ、キャラメル、羊かんウィスキー、驛の賣店で賣つてゐるものなら一應とりそろえてある。メタルとお好みの品とを交換すればそれでいゝのだ。これでは不安を感じてゐるひまがない。したがつてつかの間でも安心の連鎖である。たまにストップして丸が出なければどん／＼と機械をたゞいて「二十三番丸が出ねえぞ」ととなれば「ハイ」と答えてボトリと落ちる。かく考えれば流行のパチンコが永遠性を帯びて來た理由

がやゝうなすかれる。

パチンコを大がかりにしたものに競輪がある。ぐる／＼廻る所も似てゐる。フレッシュな銀色の機械によつてくり擴げられるゲームも似てゐる。が、一番似てゐるものは何と言つてもすぐ現れる結果であらう。一レース終ると場内はほとんど空になる。スタンドを降りて馬券ならざる車券を買う。豫想屋がギャ／＼言う。下當りの券がとび散る。吸いさしの煙草がなげ出される。焼鳥屋からは煙がもう／＼と立つ、現代人はこう言う最も不安な雰囲気満足なのである。場内はきわめて規則正しい。審判員はスマートな服で一定のコースを通つて位置につく、出發掛の發砲も機械のようだ。出發と同時に一直線になつてコースをぐる／＼まわり出す。最後の一週目の半鐘が鳴りひびく、すると色とり／＼の選手はけしかけられたように廻り出す。ゴールインする。喜びと言うより一種の嘆息が場内をつゝむ、が、それよりも當りの金額がアナウンスされるとき、この嘆息は一そう深刻である。「不安」の極致、「不安」の聲とはこんなものかと思われる程だ。

このようなことを拾つてゆけば例はいくらでもある。競馬、寶くじ、何々證券、保全經濟會、新興宗教、不安を利用し、不安をキヤッチし、不安でなければ成り立たないものゝ何と數多いことか、彼等はそこに集る群集を佛教用語を平氣で持つていつて、表で善男善女とほめそやし、裏では愚夫愚婦と笑つて舌を出す。

こんなことを考えるとき思い出されるのは競馬、競輪の豫想屋である。わあ／＼宣傳する。メガホンをもつてはしやぎ立てる。不安な愚夫愚婦はたあいもなくそのとりこになる。三人、五人、數が多ければそれにだまされて益々群集がつめかける。彼は十圓出したものにだけいそ／＼と番號を傳える。その表情にたまらなくなつた群集は、次々と彼に十圓、二十圓の金をさし上げる。

レースが終る。當つた豫想屋は「おめでとうございます、おめでとうございます。」を連發する。不當りの豫想屋は姿を消して他の出入口にまわつてゐる。おめでたいのはこの善男善女たちである。

もつとも彼等は、不安を満喫したいのである。

瞬間の不安を満足することによつて不安の醍醐味を味い、それによつて三昧の境界に到らんことをねがい、刻々にせまりくる他の不安よりの逃避を行つてゐるのである。

新興宗教のもつ魅力もここにある。不安は色々の姿をもつて人々の心をかき亂す。先づ金もうけ、病氣、度重る家庭の不運、豫想屋はそこに集る。當ろうが外れようがそんなことは知つたことではない。外れれば外れる程豫想屋を追う群集のように不幸になればなる程新興宗教に熱中する。不安よりの逃避を不安の中に求めて、ついに精神、物質を根こそぎさらわれた群集のように、行きつくまで行きついてはじめて氣がついたときには元も子もかなぐり吸いとられた後である。

世が進むにつれて新興宗教の盛んとなるのもこの理による。世が進めば社會は複雑化する。複雑化すれば不合理性を増す、不合理性を増せば不安がつる。不安がつればパチンコ屋がふえ、競輪が盛んとなり、新しい神様が舌なめずりをはじめめる結果となる。信者が上下貴賤を問はず、インテリ、テイノーを選ばないのは丁度パチンコのファンと同然である。一攫千金がそこに芽ばえる。家業はお

つぱり出される。

こゝに於てみ佛の語を聞こう。中阿含四十三卷の溫泉林天經には次の偈文がある。

「不變不動を知りてこれを追へ

今日こそは勤苦をなすべく、誰か明日の死を知らんや

吾等彼の死の大軍と戦いて克つなきが故に

斯の如く熱烈に晝夜に怠りなくして住するもの、

それをば良き牟尼は善一の樂とは呼ぶ」不安に對するに不安をもつてしては、とうてい不安はのぞかれない。ほんとうに大地に根ざして不變不動なるものを追つてこそ大安心は得られるものなのである。明日の日の命さえはかりがたい者にとつて、どうして不安のない世界が望まれよう。安住は今日の一日を正業に送る以外には得られない。これを熱烈に怠りなく行うことにこそ、もつともとおとい樂みがある。と言はれてゐる。

冬去るとき春光を見る。花散れば夏の日がかがやく。宇宙の運行は刻々に眞理を傳えて止まるを知らない。不安の妄想をはらい去り、正信、正行、正業に還つて安住のうちに新らしい年を迎へたいものである。

× 幼稚園・保育所の増加は實にお
どろく可きものである。就學前の
児童の教育と云うことについて一
般家庭でも考えるようになり、幼
稚園、保育園の入園希望者が激増
するにつれて、幼稚園、保育所の
施設も多くなつて來たのである。

しかし、この激増した、幼稚園
保育所の中には「保育」の何たる
こともわきまえず、希望者が多い
から儲かりそうだと云うような考
え方で施設を作るものもあるよう
に聞くが、これは誠にこまつたこ
とである。

幼稚園と保育所の區別さえ知ら
ず、「幼稚園保母」と云つたり、「保
母免許狀」と云つたりしているよ
うなのを見受ける。

更に、今日まで經營して來てい
る人の中にも、終戦後のアメリカ
のサゼンションによる、アメリカ
流の保育をそのまゝ、情勢の全く
ちがつてゐる我が國に當てはめよ
うとするものや、或は、正しい日
本の保育と云うものが、どんな目
標に、どんな方法に、よつてなさ
れなければならぬかと云うこと
を知らないで、その日ぐらしの保

育をやつてゐるものもある。どうし
ても正しい保育指導者が必要であ
る。

× ここに幼児保育の權威内山憲尙
氏の名著「幼児の生活と創造の保
育」は保育と云う大きな觀點から
幼稚園、保育所の保育を公平に平
等に解説し、更に幼児の生活、心

× 幼児に遊戯のみを教えて、ステ
ージにライトをあびて立たせ、親
の虚榮心の満足や、子供を大人の
玩弄物化することから、幼児の生
活を伸ばす創造の保育を力説して
いる點など正に今後の保育の行き
方を明らかにしたものと云うこと
が出来る。

×

保育の眞指針としての

評書

内山 憲尙 幼児の生活と創造の保育

理に即應して幼児の生活を生かす
と云う正しい新しい保育の基礎の
上に立ち、しかも、明治九年以來
のフレイベル萬能の保育に對して
正確なメスを振い、戦後のアメリ
カ流保育に對して長所短所を指摘
して、日本の保育の在り方を、民
族性、民族教育の上から明示して
いる。

著者は幼児教育、児童文化に三
十數年來、實際に携わり、しかも
常に研究をおこたることなく、廣
い視野と深い造詣を持ちつづけて
いる。宗門の宿者である。
増上寺の明德幼稚園初代主事と
して、大正十三年芝公園の園舎で
保育に専念されたことは世人のよ
し知るところである。現に東京高

等保育學校、聖徳保育學校、聖美
幼稚園を主管し、駒澤大學、寶仙
短大、東京都保母學院等に親しく
保育關係の講座の教鞭をとつてい
られる。

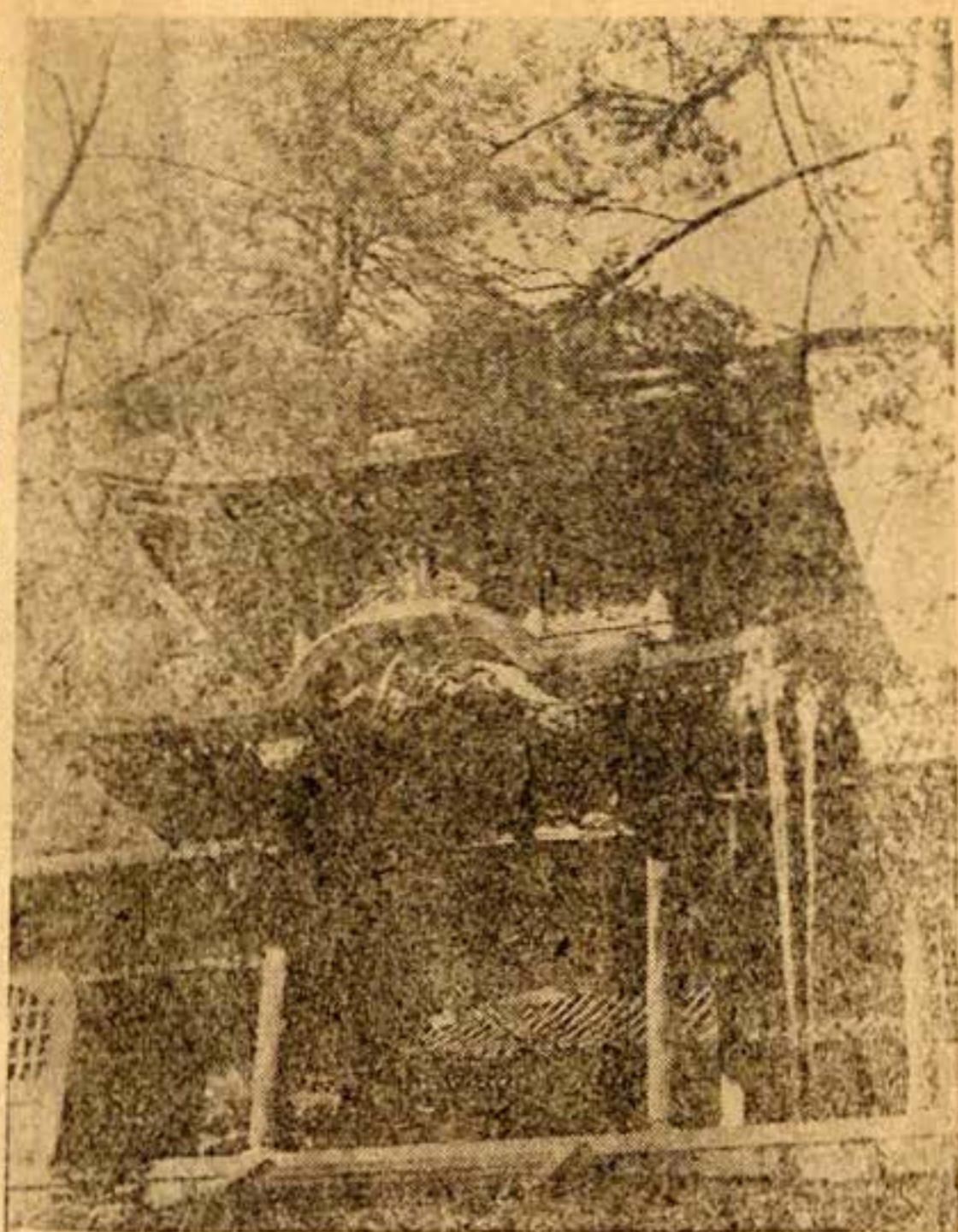
× 本書が理論一篇の書でなく、正
しい理論の上に實踐性を多く含ん
でいることも、著者の多年の経験
から生れたことと思う。

×

内容の一般をあげて見ると一、
生活と教育。二、幼児の心理生活
三、幼児の生活態形。四、保育の
意義と目的。五、幼稚園、保育所
の設置。六、創造の保育。七、創
造と民族的自覺。八、教育課程。
九、生活としての年中行事。十、
保育カリキュラム。十一、母の會
と附帶事業、附録、創造の保育カ
リキュラムと解説、保育關係法規
等で、これを見ても、新しく正
しい意味での幼稚園、保育所を開
かんとする人には是非一讀す可き
書であり、現に開設してゐる人も
必ず讀まなければならぬ保育最
良の書である。(横濱市磯子區原町
四、日本保育教材株式會社發行二
八〇圓)

紅葉深い道のく、北陸路は、旅人の心をゆすぶり、慰めと安らぎをもたらす又とない旅路である。

越前平野は果てしなく續いて、はたと突き當るあたり、輕便電車のきしむ音も高く、登り坂になつてゐることを感ずかせる。どの家も、白い糸を曝しているのは、流石に織物の名産地である。キラ／＼と陽に輝く細糸は、あざやかに一條々々見取られて美しい。



(永平寺中龍門)

北 陸 路

永平寺まいいり

安居香山

てられて、終點の驛に下車する。歩く間も無く永平寺の入口に來る。

さん／＼と聳える杉、檜の木立は箱根の關所や、日光に見られる様な景觀である。驛より余り近い爲、森嚴と云う感じは少ないが、それでも俗塵を離れることは確かである。兎角世の見世物になるこうした所は、何時しか俗塵をうけて悲しい。

ヒヤリとする庭い板敷の廊下を行き當り、受付で拜觀と晝食の申込みをする。(こゝの食事は精進料理で美味いそうである。)四通發達した電話の受話機を取つた受付僧は、

「御氣の毒ですが、少し遅いので無いのですが……」

と殷謹に晝食申込を拒んで、無禮は無い。

「たのもうー」

「おーう」

と返答があつても仰々に登床は許されず土下座して入門を頼む雲水、三日三夜雪の中に臥してやつと入門を許されたとか云う風情は此處にはない。大徳寺では、未だそんな形式を

「羽二重餅」と言う名物がある。キメの細かい肌ざはりのよい絹地のような感觸は、處女のそれにも似て、郷愁しとよなるものがある。カタクリ粉のこの感觸は、カステラ等のアバタ面には見られぬ東洋のものだ。フトそんな事を思い出す。

○

「永平寺、えいへーじ——」

降りろと言はんばかりの驛員の聲に驅りた

維持していると聞いていたが、

文化の流れは、この山門にも善男善女を送り込んで、はき出すが、必ずしも道元禪師の「喝」は入れられない。

「七堂伽藍が整っていますのは、日本ではここだけでございます」

青白い顔の雲水が、衣の袖をひらくさせながら説明をしてくれる。インテリらしいこの青年僧は、はにかみながらも牛を取る様に叮嚀である。

中雀門

随分美しい構造の建物だ。宇治の平等院を思はせるこの構造には、しばし佇むことを余議なくさせられる調和の差である。これ等は焼きたくない。日本のひとびとよ。心して守られい。

○ 永平寺は云うまでもなく道元禪師の住せられた庵である。少しく「永平寺グラフ」に依つて紹介しよう。

永平寺の開祖、道元禪師は、今を去るこ

と、七百五十年前（西暦一二〇〇）京都に

誕生された。禪師は名門の出であつたが、

不幸、幼にして両親を喪はれ、幼な心にも

痛感された人生の悲哀は、徹底的な無常觀

となり、それはやがて動かすことの出来ぬ

出家の動機となつた。決然、出家斷行の決

意を固め、あこがれの靈境比叡に向はれ

た。時は建暦二年、師は十三才であつた。

爾來、一意専心、佛教々學の研究に精進

されたのであるが、十五才のとき、はしな

くも佛教々學上に一大疑問を抱いて下山し

建仁寺にて榮西禪師に師事された。

貞應二年、二十四才の春、眞實の佛法を

修學せんものと、入宋の決意を固め、同年

三月、入宋、在地五年、歸朝後建仁寺に入

り弘法せられた。

禪師の越前入りを勧めたのは、信者の一

人、波多野茂重である。寛元元年（西一二

四三）の夏入越、翌年完成したこの寺（永

平寺）に住まわれることゝなつた。

爾來、禪師は、この永平寺にあつて、眞

實求道の修行者のために、正傳の佛法を唱

道されると共に、著作にも大いに力を注が

れた。

○

どの名利も、皆同じ様な建築の美と、古さを誇る中で、たゞこゝで變つてゐるのは雲水が居ると之うことだけである。少くも此處に居る限りは、人間的な本態を抑壓すると云う宗教の一面が、俗な世界からは、清淨と見られるものを漂はせている。それは、極めて表面的な流れかも知れぬが、せめてそこを維持するところに、嚴肅と云う名の宗教性があるのである。

今、百名程居ると云う雲水にも、この廣い場所の掃除には、仲々閉口するらしい。一、掃除。二、座禪。三、勉學と鐵則として、苦しい事には變りはない。



「この大廣間では、毎月四回お茶の會が開かれます。四五枚のせんべいを、ボリ／＼噛んで、學監達と茶話會をするのですが、とても堅苦しいものです。私達には、至極迷惑な、厭なものです。」

ニガ虫をかみつぶした様な顔をしているが、それでも説明となつては仲々シャレも入れる。

「世の常の様なロマンチックなものでないのです」

田舎からの善男善女がゲラ／＼笑う。何が何だか分らぬ様な笑いがゲラ／＼流れる。

「雲水には、必ず何日居ると云う規則はありません。居たいだけ居るのです。しかしこゝの生活は仲々苦しいので、十日位で逃げ出すのも居ます」

ドット笑いが起る。近代人には堪えられな様な生活の苦痛が、こゝでは或るナンセンスととして流れる。

○
今日は、日が温かく照つている。階段に雲水が目なたぼつこをしてヒソ／＼話しをしている。

バーン、バーン、

ドーン、ドーン、ドン、ドン、ドン……

禪寺の、ありとある鳴物が一時に鳴る。晝食を知らせる音である。雲水の動きがあらたらしい。鐘の音がこだまする。

切角の案内の大學教授の好意も、精進料理

山寺の和尚さん

電氣を説く

千葉縣館山市に、海雲という名前の淨土宗のお寺がある。このお寺の境内には子育地藏と呼ばれているお地藏さんがあつて、我が子が無事に育つように、名前を頂く人々が多い。

ここの住職栗山源道氏は、四、五年前から、お寺の附近は勿論、遠く木更津や小湊の學校まで、街でも山奥でも出かけて、電氣の話をしている篤志家である。

その理由を、栗山さんは、
「私はもと電氣の技術屋でしたが、中年に或る動機から、宗教に入りました。

百萬の回向よりは、たとえ、聴衆十萬の内から、感電して死ぬ宿縁にある人を、一人でも救えたら、回向以上の大きな功德である、と信念して居りますし、又、感電して死んだ人々の菩提をとまろう意味からも、この講演の行脚を續けて居る。」と語つて居られる。

を断はられては、一切が無に歸したやうなもの。どこと云うとらへどころもなく、たゞ

「ヨカッタネー」

と云う感歎詞を後に残して、名だたる永平寺の山門を後にした。(十一月十八日記)

栗山さんは、學校だけでなく、P・T・A青年團などの會合にも、感電のおそろしさを説かれ、又、佛の講話をして、天にも地にもかえがたい子と親の情愛を説くときにも、こんな話をして居られる。

「風雨の強い日でしたが、小學校から歸つて来た女の子が、自分の家の門の前で、切れた電線にひつかゝつて、感電して、倒れてしまつたのです。それを知つたお母さんは、玄關を飛び出して、雨にうたれてゐる我が子に走り寄つて、抱き起そうとした途端、ウーンと、氣絶してしまいました。それもそのはずですよ。電線に電氣が来て居たのですから、電線から子供を傳つて、お母さんに電氣が流れ、感電してしまつたのですね。

お母さんが、ほんの一寸、電氣の知識を持つていたら、切れた電線を干いた竹竿などで子供から離してから、子供を救ける、ということを知つていたら、こんなことにならずに済んだでしょう。

台風の季節になると、栗山さんは、講演した所へ葉書を出して、切れた電線にさわらないように、注意して居られる。

何か欠けたもの

——ジャーナリストの悩み——

高瀬 廣居

何か、違う、いや違うのではなく、何か落ちてゐるのだ。そんな呟やきが、近頃の僕には、いつも雲の様に横つてゐる。映畫「蟹工船」「夜明け前」を見たときも、中國人起舎の「龍鬚溝」と云う演劇に誘われた時も、この疑念は去らない。

大きく前進してはく人類の苦闘の歩み、ヒュマニテイの爲に、正しい條理の建設の故に傷つき痛み、不屈に、巨大な暴壓の權力にいとむ人々を眼前に曝しながら、僕は感動のよそに猶、思い悩む。

(25)

映畫や演劇に限らず、快樂の倫理を含む藝術や美しいものの形象を辿る繪畫は、時代の進歩で、觀る人々の心理分析や生活解剖を意圖し分化されて來た。文學の上での分類と更に違つた意味で、はつきりと、「なに」の意

圖」と決つて行つた。そして又作品は時代の潮流により、思想の浮沈により、その意圖に猶その上一つの刻印を押されて來た。藝術、殊に民衆の哀樂と知識欲を満たす藝術のすべでは、彼等民衆と孤立には無論の事、彼等の意志、感情、欲求、生理、生活を無視して、存在理由はなく商業資本の蓄積も、グランプリの榮譽も失われねばならないのだ。

これは決して歪んだ「俗受け」という事を云うのではない。どの様な作品も製作者の孤高な精神や卓抜した知性や優れた感受性だけでは、その意圖も正しさも秀抜さも無力な知識人の知性のムクロと、化けてしまふという事だ。

といつて、民衆が無知無頼の徒であり、劣性種だと云うのではない。フロオダエルがは

つきりと云つてゐる様に、「民衆は手堅い、素手で向つたら當方が傷いてしまふ、強固な大理石」なのである。

彼等はルオー展で三十分も小首をかしげ、解つた顔して出てくる。光琳展でも藝にうたれる。そして「君の名は」は三千萬人を動員してゐるのだ。

事の善悪や、そのものの價値の事ではない。要は、どの様に優れた思想も堅牢な精神も平明で正しい倫理觀も、大衆の知慧の實を喰らわずには何物も生れないし、それ等はすべて大衆の一切の欲求の基盤から成りたつてゐるという事だ。こんな事誰でも解つてゐるといふだろう。そして「勞働大衆は……」と云う、しかし今日の日本で、勞働大衆の名に於て叫ばれるのはいかなる組織内容をもつものを指

しているのか。組織された目的意識や階級意識の自覺された勞働者は全國三〇〇萬なのだが、僕の云う民衆ではない。だからこそそう云う云う人は、自分の内心を一般大衆から自己疎開していながら、民衆と共にあるのだと意識する擬似非進歩主義者か、大衆を抽象的（大衆を自己の周圍の人々からの印象で判斷している人々も實は抽象的なんだ）に見、考へて自己慰安している人々だと僕は云いたい。

「蟹工船」を「夜明け前」をいや「日本の氣象」を観えた民衆の心象を貴方は敲き聴いてみたか。謙虚に考へて欲しい。情熱的に吐き出され藝術的感動と香氣をまき散らす演技者と観客との心理の交流と移入は全く斷層を持たずに行われているか。観客のエモーションと聲援は、それ自體の大きな聞えであると信じてよい程組織的體系的な反應か。いや頼りなるものか。いや頼りになる様育くみ得るものなのか。僕は今更昭和初期のプロレタリア文學論争の中心になつた藝術と民衆の課題をおい返してゐるのではない。文學の様に獨を條件とし讀者が時間と空間を所有し驅使する自由を與えているものと廿世紀藝術の様

に作品と、作品の享受者との交流が一定の條件で、一定の時間と場所で行われているものとのこの大きな違いの上にたつて考へる時僕の心に去來する疑念がとけないのだ。

僕達マスコムニケーションに在る者は、毎日／＼が、全てと云つてよい。一度電波に、輪轉機にのせられた以上勝負は終る。轟々たる反響も非難も歡迎も感謝もその一瞬で決まる。僕はよく新聞の仲間が、老いて、障害の肘つきにうなだれ、没になつた原稿を嘆息まじりに想念し、一合の酒にウサ晴す老記者を語り、自分の境涯をつくづくと思わずにいられない、と云う言葉に、「記事は後に残る、音は水泡というが泡もない流れでしかないよ」と話す。どんな有益な高邁な卓説もそれが、民衆のものであり、民衆が渴望し民衆の知識の實りとなるものでない場合、その大思想家、大政治家、大宗教家は無意味な埋れた舊音機に等しい。

民衆はこの判別力をもつてゐる。民衆は一つ／＼の事を分析しない、それは直観であり生活感覺である。僕のもつ疑念はこの民衆への無知への憤りでもある。「一米は一米で二米ではない」小林秀雄は「様々な意匠」でこう云つてゐる。單純な原理、明快な判斷、これが

民衆なのだ。僕はいつも考へる、民衆は何を考へ、何を求め、どうしようとしているのかを。皇太子の歸朝歡迎會で涙した女學生が、性典映畫に入つてゆく。スターンの演奏に拍手し感動した足で淺草にエロシヨオを観にゆく。大學教授が柳橋のダルマ藝者にいれあげらる。僧侶が、料理屋で踊つて禪を外す。僕はこれを人間心理の二面性とも、皮相にあげつらおうとも、考へない。これが人間いやこの集團こそ民衆なのだ。どうにもならぬ手合だとしてもこれが無視出來ぬ。

この民衆との紐帶を求める苦惱、この苦しみが、「夜明け前」にも「蟹工船」にも「日本の氣象」にも欠けているのだ。良心的、いやそれははつきり現在のアメリカ帝國主義的封壓とファシズムへの闘いをするという強さをもつてゐる作品にさえ、この落差は見のがせない。松川事件を報道した記者を僕は知つてゐる。だから前記の作品が、作られた事實に敬意を表してゐる。眞實を伝える事が、自分の生活を脅やかすという社會で、民衆の前で「虚偽の事實」の前でうなだれる僕達の良心は、いささかでも慰められる。が、敢て、この落差を埋めなくてはならぬのだ。

僕が、この様な問題を友人に語る時彼等は僕が寺の息子である爲に、話が、現在の宗教家特に佛教家に及ぶ。既に彼等は、その期待を捨てている。佛教教理のもつ偉大な思想性の否定でも佛教者に對する蔑視でもない。「佛法」より「佛陀」となる人に絶望しているのだ。僕は秀れた宗教家である祖父をもち情熱家の父をもち、進歩的インテリの叔父をもつた爲に、比較的、所謂壓力でどうにもならぬ寄生虫の様な墓守僧侶をみなかつた。が、間々宗教放送をもつて或年月、僕の絶望ははなはだしかつた。ヴェロミタールで頭腦故障があるのではないかと想う僧侶の多い事。若干大學出のインテリ僧侶も、その社會的視野の狹隘さと權力欲の旺盛な事。ネグレクトされた人生觀、佛への利益の感謝はあつても民衆への生の結帶を感謝しない貪癡瞋の人。特に淨土宗門の人々には「諸善萬行は三世諸佛へ淨業正因なりとも彌陀の本願の行に非ず」をいふことにして墮眠してるとしか考へられない。十夜や施餓鬼に於ける説法の無氣力さ、無内容さ、マルクスボーイが、マルクスの原典を例用して、教への絶對性を轉化する卓劣さに全く似てやたらと宗祖の言葉を引く外能のない布教師。

現實の社會に切實に苦しみ、求め、生きてゐる民衆は無知ではない。歪んだ癡癡の僧侶などよりより正しく酷しく現實を見、嘗てゐるのだ。「如來の化に臨むは偏に 後の學生の爲なり」ということを忘れてゐるのではないか。

日本史を繙くまでもなく中世の詩人達人は激しい自己追求に生き、例い内面的完成にのみ努力したとはいへ、その求道の激烈さは、言語と心の統一という、人間的課題のうちに充分窺えよう。より人間的で俗物性あふれながらも、立派に生きた彼等の心底には、無常を超え、無常歎ずる自己も又、その一極微でしか過ぎぬとみた心の激しさ、運命というか宿業というか、無常な現實、不安と戦亂と權欲の奮闘に狭撃され、生活の糸もたれ、猶も不遇をかこつことなく不拔に生き、その現實感を痛切に味い、歴史や社會の變轉と、醜陋さに絶えざる關心と旺盛な慾意を持ち、傷心にうちひしるがれる事なく、いかなる經濟苦や孤獨にも耐え、一見、非社會的出世間的營みをなしつつも、敢然と、渦亂の只中にたつて生きた姿、この姿の片鱗だに今の僧侶にあらうか。

民衆に生き衆生濟度に境涯をかける實踐の

道をはづれて猶、寺院が存在している不可思議は何故か。いや違ふ、違ふ、僕の疑念は又つきない。近代科學の洗禮を拒け哲學的思辨に輸入哲理を附合してゐる若い青年學徒と全く同じの青年僧侶。つゝましき生活の余り、民衆のパチンコへの魅力を解せない僧侶、M・S・Aのスペルさえ満足に云えぬ宗教家。それは現代の遺物かと思えばそうではないのだ。民衆、社會、歴史、進化、世界、それ等一切に眼を蔽う彼等は水害を救えと募金に參るのだ。

玉きはる命をだにも知らぬ世に

いうにもたえぬ身をば嘆かず (定家)

「はた生死の轉變を前におきながらほつ句すべきわざにあられど、よのつね此の道を心に籠して、年々や半白に過ぎたれば、いねて、朝雲暮烟の間をかけりさめては山水野鳥の聲におどろく是佛の妄執といましめ給える。たゞちに今の身の上におぼえ待る也此の後はただ生前の俳諧をわすれむとおもふは」(笈日記)

この様な「道への心」自己の心とそのオブジェとの一致に凡てをかける事は、定家や芭蕉の藝術史でない。二十世紀の藝術にも、宗教家との態度にも、いや僕達ジャーナリストという人間にとしても戒心のことなのだ。近代資本主義のもう／＼たる黒煙のうちに少くても薄い陽光が、僕達の人間性解放への、隷屬や不正への闘いへの讃歌である事を心から訴へたい。(N・H・K社會部)

難法の後滅

泉 湛 田 鶴



一
念佛教團に對する迫害は、法然上人の滅後に於て、一層激しさを加へて來た。

それは、教學の上からも、直接行動の上にも現はれた。

その頃、梅尾に當時の佛教界の大立者明恵上人がいた。彼は、佛道成就を願ふため、自ら右の耳を截り、又、松の枝に繩床を作つていつも坐禪觀法していた程の修道振りだつたので、朝野の貴賤男女の崇信をあつめていた。

上人の示寂された建應二年の十一月に、彼は摧邪輪三卷を著して、法然の動むる所は、佛意に背き、時人を迷はしめる邪説であるとして、眞向から選擇集を論破して來た。

これに對して上人の門下、播磨の信寂房は惡命義を著して、一矢をむくいた。

すると、明恵は、更に摧邪輪藏嚴記一卷を作つて應酬して來た。高潔な明恵の投じた一彈は、教界に大きな旋風を巻き起したのは云ふまでもなかつた。之を最初として、之を破

し、又之に答ふるものが續々と現はれて、花々しい論戰が行はれた。

一方、念佛禁示の布告が、たびたび出で、禁示の高札が、いたる所に立てられたが、何の効もなかつた。

人之れを止めんとするも、法更に止まり給はず、と云うのか、他から念佛門に壓迫を加うる毎に、下行く水の流れ廣がるように、念佛の聲は洋々として、山間僻地にまで行き流れ耳にみちていた。

嚴制の下にあつて、ますます專修の盛んとなり念佛の弘通して行く有様を、とりわけそねんだのは、近頃上野國から叡山に登つた並榎の堅者定照であつた。

彼は、痛憤の餘り彈選擇と云う一書を作つて、隆寛の庵へ送つた。隆寛は、初め天台に入り慈鎮和尚の門下として、山門でも彼の學識には一目も二目もおいていた程の學者であつたが、後に上人の門に入つて念佛の行者となつていた。

定照は、これによつて隆寛を完全に沈黙さ

せると自負していた。

ところが、彼の書を一讀した八十歳に手のとどく隆寛は、老境を知らぬ若者のような情熱をもつて、

「何を小癪な小僧」とばかり顯選擇を著して、難破をくつがへして上人の素意を表し、文中に、

「貴様の僻破は、まるで闇夜の弓矢一つも命中せぬ」

と辛辣にやつつけた。

よせばいいのに、岡本迎蓮なる者、定照の書を關東に送ると、道俗の信者これを見て皆定照の誤りて指摘して笑つた。

これが、火に油を注ぐ結果となつた。

痛打を食つた定照は、今山門の堅者としていささか聞えのある定照の書を、關東にまで送つて笑ひ草にするとはと、烈火の如く憤つた。

山門に觸れ歩くと、これを聞いた宗徒も、共に大いに怒つた。

深く遺恨に思つた定照は、檄を一山に飛ば

し座主圓基に訴へ、隆寛幸西等を追放遠流の刑に處するやう奏聞し強訴した。

朝廷でも、濫訴に手がつけられず、終に律師等の裁可が下された。

隆寛は陸奥へ、空阿を薩摩へ、幸西を壹岐へ配流と宣を發せられ、餘黨は其の在所を尋ね搜し、永く京都を追却すべしとの宣が下された。

憤懣やるかたない執權な定照は、まだこの處分にあきたらず、上人の大谷の墳墓をあばいて、遺骸を鴨川に流せといきりたつた。

大谷の墳墓は、いつの間にか御廟と稱せられ上人在世の昔を慕い、なき今を悲しんで御廟堂に參詣する念佛信者は、ひきも切れない程であつた。

定照は、これこそ、信者の心の攪亂を計る第一の計なりと考へ、又教團の基礎を掘り返せると思つたのだつた。

實の處、信者の尊崇の的である墳墓をあばくことは、信者にとつて大きな心の動搖を招くことは必定であつた。

二

嘉祿三年（安貞元年）六月廿二日、上人往生の後、十五年目の事であつた。

叡山の大講堂の前に、三塔の大家が群り寄り、がうがうたる會談に熱していた。

くわ頭のうちから二つの目をいからして定照は、激越な言葉で大家をあおつていた。

やがて中央に進み出た定照の手に、一巻の書が握ぎられていた。

「各々方、これは法然の選擇集でござる。

山門を衰微に導く咒はしい書よ。今こそ門出の血祭にしてくれん、これこそ、三世佛恩に報ぜんためなり」

と叫びながら、何の腹いせか彼は、ズタズタに引きさくと、火を放つた。

當時上人の著作になる選擇集は、あたかも釋尊の説かれた經文のやうに尊ばれていたのだつた。

口にあやしげな咒文を誦へ、珠數をさらさらともんだ。

紙片は、焰となつて、赤い木の葉のやうに

大空に舞ひ上つた。

「ワッ」と、一時に喚聲があがつた。

「あな面白し、念佛の教團がもえるよ」

と手を叩き、雀躍するものもいた。

悪魔のような形相で、定照は快心の笑をたたえてゐる。

・「念佛の根本たる法然が大谷の墳墓を破却して、彼の遺骸を鴨川にすてるべし」

と、彼は命じた。

「ワッ」と、再び喚聲が起つた。

「急げ、法然の廟へ」

山門の所司が先頭となつて數百人、手はづを定め山を下り大谷へと向つた。

なだれをうつつて下りて来る大衆の姿を眺めて、巷の人々は耳目をおどろかし、

「荒法師ども、又何をするやら」

と、顔をしかめ、「物騒な世の中」と、暗い顔をしていた。

山門の僧徒、大谷の法然の廟へ押し寄せるとの報せに、六波羅の守護職修理亮、平時平

は

「以ての外の狼藉、黙し難き次第」

といかり、急ぎ禁制せしむべしと、頓宮の

内藤内藤五郎兵衛尉盛政法師西佛を遣はして鎮壓に向はしめた。

「時遅れては一大事」

と、西佛は息子一人をつれ、十五騎を率いて土煙を立てて駆け急いだ。

廟へ數知れぬ山徒が雲集していた。久しく事なきに苦しんでいた山法師等は、競い立つていた。

馬を彼等の間近かに進めた西佛は、

「六波羅の使者として内藤盛政向いたり、方々止りたまへ」

と大音聲に呼ばはつた。

兩者の間に問答が取り交はされた。

西佛は、詞をつつくして彼等の暴舉を制止しようと言めた。

が、誇りきつた慢心と、怨恨を含んだ殺氣とが、大衆にみなぎつていたからたまらな

い。「たとい六波羅の命なりとも耳をかすな。

早く墳墓をあばけ」

口々に罵り喚きながら、恥を知らない荒僧

ぞろい猛り狂うて、早くも扉を破ぶり廟堂に亂入すると、手あたり次第に廟堂を破却し、

房舎をこぼち、

「ざまを見ろ」

と、惡罵しながら、碑石を毀ち初めた。

「死屍を恥しめるとは、鬼畜の行いよな」これを眺めて西佛の毛孔の一つ一つが粟だつた。怵えに怵えていたが、心にいかりが雪

崩をうち

「あの、ここな惡僧ばら」と憤りに大喝して、

「醫王山王もきこしめせ。念佛守護の赤山大明神にかはりたてまつりて、魔縁うちはらい侍らん。いつはりて四明三千の使と號し、

みだりに四魔三障のむらがりきたるか、もと

どりは主君のために、そのかみきりにき、命は師範のためにただいま捨つべし、あにはかりきや、戰場をもて往生の門出とし、惡徒を

もて逆縁の知識とすべしとは、善惡不二のこ

は

とはり、邪正一如のをきては、山門の使ならばさだめてきき知るらん、自他もろともに、九品蓮臺の同行なり、怨親おなじく七量樹下の新賓たらん」

と、叫びつつカツと睨めまわした。

彼の一喝に、さすがの荒僧も、膽のちぢむ思いがした。

武者として上人に救はれ、眞實の道に入る事の出来た御恩を報ずる時が來たと喜び、一命を捧げて念佛の魔軍をしりぞけ、兇徒をしづめんと父子馬の轡を並べて、阿修羅のように戦つた。

しばし、僧と兵とが揉み合つた。

悍馬は、馬上の主の怒氣を移して、ひどく刎ね狂うた。

これしきの人数と高をくくつていた山門の大衆も、忽ち馬の蹄を蹴飛ばされ、死者も怪我人も出し初めた。

さしもの荒法師も、西佛等の勢におそれ、逃げ腰を浮かすと、蜘蛛の子を散らすやうにいつくとも退散してしまつた。

殆ど堂舎はあと形もなく破壊されてしまつたが、幸に墳墓には未だ手をかけるひまもなく、撃退させることが出来た。

吉水の弟子たちのこの夜の混雜は思ひやられる。皆愕然と顔色を失ひ狼狽したのは勿論であつた。この事件は、世の人々の心をいたく震駭させた。

幸に、西佛の力で墳墓を守る事が出来、一時山門の衆の鳴りをひそめたものの、定照の恨みは浅くはないので、必ず目的を遂げようと、更に大舉して襲つて來るに相違ないと思はれた。

で、その夜、法蓮房信空を始め主だつた弟子達は、妙香院僧正良快（月輪禪定の息）の禪室に集つて、對策を立てるため額を集め議した。

皆沈黙な顔だつた。

今後、どうしたものか、いかなる手段を取つていいのか迷つた。種々と協議し考えたが墳墓を守るべきこれと云う名案も出なかつ

た。

「是非もないこと、いつそのこと、墳墓を移し奉じてはいかに」

深く首をうなだれて思案に耽つていた信空は、悲痛な決心をしたかのやうに、おもむろに提案した。

「この義尤もしかるべし」

と、僧正も賛意を表した。

致し方のない事とあきらめて、改葬する事に一決すると、やがて信空の命によつて、門弟等廿餘人が大谷へと遣はされた。

跡形もなく破却された廟堂を眺めて、彼等は暫し果然とたたずんだ。

僧の身を忘れての慘忍な行爲に、悲憤の餘り腹わたが煮えかへる思ひがした。

「あな傷まし、墓をあばくとは犬の如き仕業よな、この恥辱をどうする」

怒氣をみなぎらせ、復讐せよと敵愾心にもゆる者もいた。

斷腸の思いで、情涙をぬぐいながら、「是非ない事」と諦めて、地下に安らかに眠つてい

る御遺骸を廻り返した。

山門の衆に咎められ奪われる事をおそれて晝間運ぶ事が出来なかつたので、夜の更けるを待った。

深夜御遺骸を奉じて、夜星を仰ぎ、細い野道を通り森をぬけ丘を登つて、灯のない道を生氣もなく、眸を伏せて肅々と歩んだ。

萬一をおそれて、六波羅から兵を出して護衛についた。これは、六波羅に上人の信者が數多くいたからであつた。

盛政入道西佛は云はずもがなである。鹽谷周防守朝親入道信生、宇都宮彌三郎頼綱入道蓮生、千葉六郎太夫入道法阿、澁谷七郎入道道遍の面々、家の子郎黨一千を率いて、物の具きびしく鎧はせて、騎馬と徒歩とで前後を守つた。

誰も口をきかうとする者もなく、星影は寂しかつた。幸に山門の僧にも發見されず、嵯峨の二尊院に趣く事が出来て、ほつと安堵の胸をなで下した。

「めつたに、他に洩らすでないぞ」

と、在所を秘する事を、互に佛事に堅く誓つて忍びやかに解散した。

山徒は、尙も御遺骸の行方を捜し求め、早くも二尊院にある事を探知し、險惡なうごめきを見せている風説が傳つた。

山徒の執餘りに執拗さに、弟子たちは怒りにみなぎつたが、難を避けるより外なかつた。

五日目の廿八日のこと、ここも屈強の地でなかつたので潜かに再度遺骸を、太秦廣隆寺前の來迎房圓空の許に遷した。

弟子たちのくやしき、無念さ、互に慰めようとしても、なぐさめきれないものがあつた。

其の後、山の壓迫迫害は、更に止まる事を知らなかつた。

京に入つた山徒は、路頭で念佛者の姿を發見すると、有無を云はせず捕へて黒衣を破り笠を剪る暴行を敢てした。

又、淨土の法門を信じ念佛行者を保護する貴顯の家々に、念佛者追放の事をふれ廻し、

又、清水寺から祇園あたりの草庵に隠れている念佛行者を逐出し捕へ、その庵を破壊し、使應に拘留すると云う風だつた。

で、これがために京洛中あれほど盛んであつた禮讃の聲も聞えなくなり、黒衣の色その跡を絶つたと云ふ。

なを諸國に念佛興行の聞えある事を知つた山徒は、再三幕府に訴えて、諸國の守職地頭の手を煩はして、念佛を停止せしめるに至つた。

が、かうした激しい度重なる御難は、信者にとつて、内にはいいよいつよい聖紐となり外には固い熱烈なる協力が加はつて來て、信火はますます燃え盛つて行くのだつた。

淨土 新年號

十二月發行
二十八日

例月の吉田絃二郎先生は、今回は書簡の形式でお書き下さつてゐる。椎尾法主、奥野信太郎兩氏の年頭指針、淨土人の百人一首内山憲尙氏の童話等あり、期待してお待ち下さい。

保育欄

一、淨保連東京部會では十一月例會を杉並學園で開催。同園長森芳俊師は「新しい寺の行き方」を長年歩いてこられた方である。創立當初、かゝる養護施設に對し補助のあつたのは賀川豊彦、穂積重遠と師の三氏あるのみであつた。寺があつて始まつた事でなく、苦心の創業で初めは二三人であつたが、現在五十有餘名を容れ、卒業生數百人に及び、すでに世帯を持つているものも少くない。師の佛教精神による保育はひじょうに近隣に好評と尊敬を持ち、法要、法話の信頼に來るやうになり、今回はかゝる人々の熱意により佛間の竣工を見るに到つた程である。その改装は八十萬圓の淨財を以つてなされたが、中には一口十五萬圓の篤志もある。園児は毎朝佛間でおつとめをするが、其外、同園の信徒とでもいふべき人々の「佛間」として師の指導が行はれてゐる。單なる佛間が出来たといふ話でなく、師の努力と教化との結實として、學ぶべきであらう。

一、成道會はおさとりの日として各園それぞれの催しがある、花祭のやうに國民行事として親しまれる日も來よう。

芝園だより

○吹きそめた木枯をきゝながら、本年最後の後記を書き。ふり返えて此一年。何をか云わんである。來る年にのみ期待するには少し年をとりすぎたようだが、現實には、そうするより仕方のない年末の感懷である。

○吉田・鳩山が握手した。この裏には色々の批判もあるようだが、純粹に考えて、握手するということはいいいことである。握手。どうでしょう。吾々の間にも、單純に割り切つて、握手の効用を必要としないでしょうか。

○先日南の國、三浦三崎に遊び、白秋の詩碑の前に立つて、その若き熱情に耳を傾けて來ました。お土産は、三崎文化を事實上掌握している高麗義光氏から、新しい構想での法然上人傳を豫約したものと。新春の本誌を飾るに適しいものと御期待下さい。

○毎月、巻頭言と稱して、愚にも

つかぬ惡口を、おく面もなく掲げて來た罪をお許るし下さい。正直にいつて一片の駄文に三日の苦吟を要するので、いささかへこたれていきます。どなたか代つて下さい

○記憶は過去を淨化する。私も此一年を美しい過去として大切に、心の棚にしまいこんで、更に馬蹄を加えうべく、一步前進することとします。どうか讀者の皆様も益々御健祥の上、いよいよ本誌のために御協力下さい。(竹中)

○垣もなく外に横上げられた黒々とした石炭、俵炭の山の傍を人々は慌しい師走の足どりで見向きもしないで通りすぎて行く。衣食足りて禮節を知ると云ふかだんく世間は落ついてきたという事を感じる。

○本誌も本年は事なくて越年。――それでは平凡、何とかして、こらで一ふんばりといふ所だが、未だ機と力が熟さぬ。明年は發會滿二十周年、ヒットエンドランをやりたいたいものです。(安居)

○十一月廿一日は賢順先生宅にて編集會議を開き、大に之について論じた。陽春を期して東西兩京を

中心に華々しく展開されよう。

○特に來年度は新しい教化のモデル、常に絶對の信を求めてやまない苦惱の啓開等につき一步を進めたい。會員諸氏の大小不問の建設的體驗、意見をどしどしお送り下さい。但し採否一任させて下さい。

○ではよき御越年を(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(千共)。毎號定價三十圓千四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年十二月十日印刷
昭和廿八年十二月十五日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田區保町一ノ十
東京都港區芝公園五ノ一〇
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話・芝(四三)一三二八

F.F.D幻燈機

映寫機(ふつうの映寫機と略同じ性能)

ミナシキ12880圓送 500圓

マスター13500圓送 500圓

スライド(フィルム)

各巻3~500圓程度、數百種、

一報カタログ進呈

本會代理責任取次(會員には一割引サービス)

勸學 林隆碩述

淨土への道

—五重の話—

B6版 百五十五頁
定價百圓 送二十圓

去る五月知恩院勢至堂にてなされた五重勸誡をそのまゝ筆記したもので、布教を志す宗侶は勿論、本宗信徒は居乍らにして五重のお話が聴ける必讀の書である。

京都市東山區林下町

發行所

知恩院教務部

振替 京都 八一三

法要・年末・年始の施本にトラクトを

淨土編輯部編

信徒必携

淨土信徒としては之だけは知つておきたいこと、心得ておきたいこと等を簡單にわかりやすくまとめた苦心の編輯になるもので、特に説教、輪讀會用テキストに好適

藤井實應著

一枚起請文

宗義の極致の一枚起請文を敬虔なる信仰の持主である師がじゅんくと説かれている

(B6 16頁 定價10圓 送料8圓 50部以上割引)
(100部以上割引、一枚起請文は寺名等刷込希望1圓増)

法然上人鑽仰會